

# 28PB-am241

*Trichosporon asahii* のコロニー形態変化と表現型の解析

○市川 智恵<sup>1</sup>, 大鐘 ゆづは<sup>1</sup>, 吉山 菜緒<sup>1</sup>, 池田 玲子<sup>1</sup> (<sup>1</sup>明治薬大・感染制御)

【目的】病原性酵母 *Trichosporon asahii* は深在性真菌症の起原因菌として知られているが、その感染機序や病原因子については明らかでない。我々はこれまでに、*T. asahii* が高頻度に形態変化をおこすことを報告しており、形態により酵素産生性に違いがあることを示している。コロニー形態変化により生じたスイッチコロニーでは、他にも表現型に多様な違いが生じていると考え、本研究では、病原性に関わる因子の一つとして接着性に着目して形態による違いを解析した。

【方法および結果】 *T. asahii* 臨床分離株を自発的に形態スイッチさせて、コロニー表面の特徴によりコロニーを分類し、各形態株を株化した。株化したコロニー形態の中から、コロニー表面が粉状で白色の **white** 株および、ややマットな **off-white** 株について接着性の解析を行った。培養細胞用のディッシュ表面への接着を解析した結果、**white** 株よりも **off-white** 株でより接着しやすく、その中でもさらに強く接着する **off-white** 株の存在が示された。高接着性を示した2株と弱接着株の菌体からタンパク質を抽出し、SDS-PAGE で分離後、CBB 染色を行い、発現量の異なるタンパク質のバンドを決定した。バンドを切り出し、N 末端シーケンスにより分子を同定した。

【考察】今回得られたスイッチ株では、プラスチックディッシュ表面への接着性が異なる形態株が存在したことから、生体内で生じる形態変化が *T. asahii* の生存や組織侵襲性などへ影響している可能性が示唆された。